

At の意味論

加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀

1. はじめに

日本語の「認める」という動詞には、少なくとも (1) の3つの用法がある。

- (1) 「認める」の用法
 - a. 用法1 “permit”
例：「途中退出は認められない」
 - b. 用法2 “find”
例：「特に病歴は認められない」
 - c. 用法3 “admit”
例：「自分の落ち度を認められない」

本稿では、個々の用例がどの用法であるかを特定し分類することには関心がない。本稿で関心があるのは、(1) のような用例がどういう時にどういう条件の下で成立するのか、という、(2) のような用法の条件の記述である¹。

- (2) 用法の条件
 - ・「認める」の “permit” の用法には、目的語が動作か動作名詞でなければならない、という条件がある
 - ・“find” の用法には、目的語が「地と対比するもの」でなければならない、という条件がある
 - ・“admit” の用法には、目的語が命題もしくはそれを名詞表現にしたものでなければなら

¹ 本稿で「用法」という時、それはその単語が単語固有のものとして持つ「語彙的意味」とは区別して用いていることに注意されたい。本稿では、動詞「認める」に見られる (1) の3つの用法が、単語固有の語彙的意味であるかどうかには踏み込まないが、以下で扱う at の諸用法は、あくまでも「用法」であって、at という語彙に固有の意味 (= 語彙的意味) ではない、という主張を展開する。

ない、という条件がある

個々の用法は、使われる文脈が違う。だから、用法の記述においては、「こういう用法がある」と言うだけでは不十分であり、「違いは文脈による」と言うのも同程度に不十分である。なぜなら、どういう文脈であるのかを特定しない限り、新しい情報を付け加えていることにはならないからである。しかし、(2) のように用法の条件を特定すれば、なぜそういう用法があるのか、を解明することにつながる。それが本稿のめざす方向性である。

本稿では、前置詞 at の意味を考察する。本稿の目的は次の3点である。

- ① at には〈特定〉するということしかないという想定の下で十分な記述ができることを示す。つまり、本稿では、少なくとも at に関しては、徹底した単義論を展開する。
- ② 「中心義」や「中核」を想定する立場では、「中心義」や「中核」以外にも語彙的意味が存在することになる。本稿ではその存在、つまり at の多義性を否定する。
- ③ 一見多義的と思われる場合でも、それぞれの用法は、例えば (2) のように、使われる環境に限られるという事実を重視する。語彙的意味が薄い前置詞の場合には、個々の用法は、当該の前置詞の語彙的意味ではなく、それが置かれた環境 (例えばその文で使われている動詞等) の意味である、ということの本稿で主張する。その主張の下では、前置詞の意味の分析は、実は個々の用法の環境、つまり (2) のような用法の条件を解明していくことに他ならない。

2. 先行研究とその批判

辞書においては、例えば『オックスフォード現

代英英辞典』では13、『Collins コウビルド英英辞典』では19、というように、atには非常に多くの意味または用法があげられている。つまり、atの守備範囲は非常に広い。この広い守備範囲をどう考えるかに関し、先行研究には、atに「点」という中心義を設定する立場と、そうしない立場の二つの流れが認められる。

(3) 先行研究の大きな2つの流れ

(a) 中心義：点

(Hill (1969)、小西 (1976、1997)、Herskovits (1986)、Dirven (1994)、小寺・小延 (2001)、森山 (2010)、田中 (2011)、安藤 (2012))

(b) その他

(Rauh (1994)、Hawkins (1994)、Lindstronberg (1997)、花崎 & 加藤 (2009)、Hanazaki & Hanazaki (2008)、花崎 & 花崎 2009))

例えば、安藤 (2012) では、atは(4a、b)のように基本的には場所・時間の〈一点〉(point)を表すとし、それ以外のものは独立した用法として認めていく、というアプローチを取っているが、それが標準的な見方と言って差し支えないだろう。

(4) a. She called at my house on her way home.

(場所の一点)

b. There's a meeting at 2.30 this afternoon.

(時間の一点)

c. I bought these books at a dollar each.

(目盛りの at)

d. I stole a glance at the girl. (目標の at)

e. France was then at war with Germany.

(状態の at)

f. I was surprised at the news./ She wept at the sight of his misery.

(原因の at) (以上、安藤 (2012))

Dirven (1994) は、atの中心義は空間における Orientation Point であり、時間用法やその他の用法をそこからの転用としている。また Hawkins (1994): は、atによってプロファイルされるのは COINCIDENCE という関係であり、2つのモノが一つの物理的空間を占めて存在している状態を at

を使って表すと考えている。また、花崎美紀と花崎一夫の一連の研究では、atの中心義を「重なり」として諸用法を説明することを試みている。

このように、atの用法に関する先行研究では、「点」を中心義とするかどうかはともかく、何らかの中心義を設定し、それ以外の用法をそこからの転用と考えるというところは一致している。

しかし、そのようなアプローチでは、例えば(5)のような「理由・きっかけ」や、「巧拙の対象」のような用法は、どの研究でも中心的と考えている空間的な用法からはかなりの隔りがあり、したがって空間用法からそれらの用法を導き出すことには無理があるように思われる²。

(5) 先行研究で扱えない事例

(a) be surprised at the news

(b) be good at golf

このような事例は、従来のアプローチでは at の用法を十分説明することはできない、ということ強く示唆している。そのため、ここでは、ある特定の用法を中心義とする、というアプローチは取らない。言い換えれば、atには「理由」や「巧拙の対象」という意味は存在しない、という主張を本稿では展開する。なお、念のために明らかにしておくが、「中心義」や「中核」という概念を想定することは、中心的または中核的でない意味が存在することを自動的に主張することに注意されたい。

² Atが多義であるとする立場では、少なくとも、何段階かの「意味拡張」や「比喩」による派生を想定しなければならぬ。しかし、以下で展開する本稿での考え方では、表面的な「多義性」を at の語彙的意味に求めず、上述の(2)のような条件=環境に求めるため、そのような想定はごく単純に無用である。なお、多義性を主張する立場でも、個々の用法の条件=環境について記述しなければならないことは言うまでもない。

なお、匿名の査読者は、なぜそのような分析が at だけで主張できるのかを説明しなければならないと指摘した。本稿では、このような分析が at だけに可能であると主張するつもりは全くなく、逆に、前置詞のような語彙的意味が薄い単語は、多かれ少なかれ at と同様の分析をするべきであると考えており、実際、加藤・花崎・花崎 (2014) は to をそのように分析している。また、加藤 (2007) は助詞デをそのように分析している。

以下、at の意味は、at の全用法に共通する概念である〈特定〉であるとし、個々の用法は、その〈特定〉が置かれる文脈によって決定される、という提案をする。このアプローチにおいては、個々の用法を導き出す文脈が何であるのかを明確に述べるのが中心課題になる。

3. 本論

3.1 〈特定〉という考え方

At の意味は点であると言われてるが、本稿の見方では、at の意味を次のように考える。

(6) 本稿が提唱する At の語彙的意味

[_{PP} at NP] において、at は、「ある環境において指定されるべきものが NP である」という意味を持ち、かつそれ以上の語彙的意味を持たない

at の意味：〈特定〉

中心義や中核的意味を想定する立場で言われる多様な「意味」は、(6) の立場では存在しないものとする。 (6) の立場では、それらは、この〈特定〉が置かれる文脈に応じて解釈される、その解釈のことを言っている、ということになる。端的に言って、前置詞や助詞の様々な意味とされているものは、実は当該の前置詞の語彙的意味ではなく、その前置詞や助詞が置かれている文脈 ((6) で言うところの「環境」) の意味である。³ (6) の意味規定は長くて不便であるため、本稿では、以下、at の意味は〈特定〉であるという言い方をするが、それは (6) の内容をひとことで言い表したものである。

(6) が言うところは次のような内容である。(7) から (9) は事実上同じ事象を記述した文である。

³ 例えば、He went to Tokyo. の to は「着点」を表し、He woke up to the alarm. では「～の音等に合わせて」という意味で用いられている、と考えるのが一般的な理解であろう。しかし本稿の立場ではそう考えない。これらの「着点」や「～の音等に合わせて」は to 自体の意味ではなく、to が置かれた文脈の持つ意味である。前置詞 to 自体の意味は〈矢印〉でしかなく、to の多様な意味であるとされているものは、実は to の意味ではなく、to が置かれた環境の意味である。この主張の詳細は加藤・花崎・花崎 (2014) を参照されたい。

このうち、(7) は、beach を「表面を持つもの」として見た場合の言い方である。それは、on がその目的語として表面を持つものを要求するからである。(8) は、beach を領域として見た場合の言い方である。それは、in がその目的語として「中と外を区別できる形」つまり二次元または三次元の領域を要求するからである。このように、in と on はその目的語の形を決めている、と言える。(9) についてはすぐ後で立ち返る。

(7) There are so many young people on the beach.
「表面を持つもの」

(8) There are so many young people in the beach.
「中と外を区別できる形」

(9) There are so many young people at the beach.

(7) と (8) で前置詞がやっていることをまとめておこう。

(10) 前置詞はその目的語の形を規定する

それでは、(9) では at は何をしているのだろうか。In と on を使うことができる環境で、(9) ではあえてそれらではなく at を使っている。(6) を主張する本稿の立場では、at がしていることは (11) であり、at の特徴は (12) であるということになる。

(11) (9) で at が表示していること

ここでは the beach の形状は問題にならず、at は直後に来る〈場所〉が何であるかを特定する役割のみを果たしている

(12) at の特徴 1

at の意味論的特徴は、他の前置詞と違って、目的語の形を規定しないところにある

次に、(13) から (15) の対比を見てみよう。

(13) They went to the beach.

位置関係とその変化

(14) They started for the beach.

位置関係とその変化

(15) It is located off the beach. 位置関係

(13) では、主語が to の目的語の位置に移動するという状況を表示している。そのため、to は何か

と to の目的語との位置関係とその変化を表示していると言える。(14)においても同様で、(14)でのforも、主語theyの移動する方向を示しており、forの目的語 the beach との位置関係を表示している。(15)は(13)や(14)と違って移動は含まれないが、主語itとoffの目的語 the beach との位置関係が表示されている。以上を(16)のようにまとめることができる。

- (16) 前置詞は、何かと前置詞の目的語との位置関係を表示する

ここでもう一度 at の例(9)を考えてみよう。上で確認したように、at は、その目的語の形を規定しない、という特徴がある。それを踏まえた上で(16)の観点から at を考察すると、(9)で at がしていることが(17)であることが分かる。

- (17) at の特徴 2

at は、何かと at の目的語との位置関係しか表示せず、かつその位置関係とは、「その何かの位置が at の目的語である」である

(17)は(12)の特徴をその中に織り込んでいると言える。そして(17)は、(6)を日常的な言葉で言い換えたものである。(6)で言う「ある意味領域において指定されるべきもの」は、(17)においては〈位置〉である。

一般に、at の語彙的意味は「点」であるとされているが、(6)、もしくはその言い換えである(17)は、ここまで見てきたような〈場所〉、あるいは It starts at 9:30. のような〈時刻〉に関しては等価である。「点」とする立場では、at の目的語が空間もしくは時間軸上で「点」として捉えられているという理解になり、(6)の立場では、「ある意味領域において指定されるべきもの」が〈位置〉もしくは〈時刻〉である、という理解になる。⁴

⁴ 匿名の査読者は、本稿の立場、つまり(6)であっても、このように at の目的語が「点」として解釈される場合があることから、at に「点」という中心義を設定する立場と(6)との違いが明確ではないと指摘した。しかしその指摘には二つの誤解がある。第一に、上で何度か触れたように、本稿では多義性を否定しているため中心義という概念自体を否定している。第二に、そしてより重要なことに、(6)は at の目的語が点と解釈されることを全く否定していない。(6)は、

3.2 「比喩」は不要である

これまで見てきた例では、at の意味を(6)のように考えるのと、「点」とであると言うのでは大きな差はない。しかし、次のような事例では、「点」とであるとする立場では、「その用法は『点』の比喩的用法である」と言わなければならない。

- (18) You can reach us at 03-3295-6231.

(ジーニアス)

- (19) Visit our web site at www.taishukan.co.jp.

(ジーニアス)

これらの例に対し、「点」とする立場では、「まず電話番号やウェブサイトが〈場所〉として捉えられており、更にその場所としての電話番号やウェブサイトが比喩的に「点」として捉えられている」というように、二重の比喩化を経ていると見なければならぬことに注目したい。一方、(6)の立場では、「この環境において指定されるべきものは〈アクセス情報〉であり、at はそれを特定している」というように、通常の場合表現と全く同じ仕方で解釈を与えており、そこには余分なステップはない。ここでは、文の意味内容が〈アクセス情報〉であるという解析は、at の意味を「点」とする立場でも、〈特定〉とする立場でも、同じようにしなければならないタスクである。その解析情報は、(6)の立場では、「どういう環境で〈特定〉が求められているのか」を決定するためにストレートに用いられており、その用いられ方は、at が「点」と解釈される事例(つまり、環境が「場所」のことを言っている事例)と同様である。一方、at の意味を「点」とする立場でも環境の解析が(言語学である以上当然)必要であるが、それとは別に、何段階かの「比喩」または意味的派生を考えることになる。(6)の立場から見ると、そ

at の意味は〈特定〉しかないと言っている。その at が「場所」や「位置」という文脈に置かれると、「場所」や「位置」を〈特定〉する、ということになる。それは普通の言葉で言えば「点」である。同様に、時間を言う文脈に置かれれば、時間的な「点」である。このように、(6)は、at が「点」として解釈される文脈があることは、否定しないどころか、当然の帰結として予測している。(6)が「点」について言っているのは、at の意味を「点」として考えるのは抽象度が低すぎる、ということである。

これは科学として不必要な作業を想定しているということになるものと思われる。

次のような事例も「点」とする立場では説明に苦慮することになる。

(20) She excels at chess. (ジーニアス)

(21) She is good at (playing) golf. (ジーニアス)

これらの例に対しても、「点」とする立場では、「まずチェスやゴルフが〈場所〉として捉えられており、更にその場所としてのチェスやゴルフが比喩的に「点」として捉えられている」というように、二重の比喩化を経ていると見なければならぬ。一方、(6)の立場では、「この環境において指定されるべきものは〈分野〉であり、at はそれを特定している」というように、通常の場合表現と全く同じ仕方では解釈を与えており、そこには余分なステップはない。

今の議論では、at の意味を「点」とする立場では二重の比喩化をしていると論じた。それについて解説しておこう。何かは「点」であるとするなら、それはまず直線もしくは平面もしくは空間のいずれかにおいて物理的に観察可能な一点、すなわち「座標」でなければならぬ。それは日常レベルの表現としては〈場所〉ということになる。その際、例えば「東京」という概念は、物理的には領域名であって、「東京」はいかなる意味においても「点」ではない。つまり、〈場所〉という概念を「点」として捉えた瞬間に、そこですでに「領域を点に」という比喩化が行われていることを指摘しておきたい。

その上で、例えばチェス等はいかなる意味においても物理的に定義可能な場所ではないため、例えば「競技」のような意味場を想定し、その一角を占める、という、比喩的な〈場所〉表現として解釈しなすなければならぬ。二重の比喩化とはこういう意味で言っている。これは at の意味を「点」とする場合だけに必要なステップであり、(6)の立場では全く必要ない。

「中心義」や「中核」を設定する立場では、at に様々な意味を設定することになる。そのような立場では、(20) や (21) のような事例に対し、at 自体に「巧拙の対象を表示する」という語彙的意味があると考えられることになるだろう。その場合には、例えば I am at Tokyo. で「私は東京が得意である／苦手である」という意味があってもいい

ことになることに注意されたい。(20) (21) では、実際には at は「巧拙の対象を表示」しているのであるが、(6)の立場では、at 自体にそういう意味があるのではなく、excel という動詞や good という形容詞にそういう意味があるから、文全体が「何かの巧拙」という解釈になるのである、と考えることになる。そこで at がしているのは、「何かの巧拙」の「何か」が何であるのかを〈特定〉しているだけなのである。

3.3 「～をねらって」

At の語彙的意味が（「点」ではなく）〈特定〉であるとする立場では、次のような例で at を使う理由は非常に簡単に説明される。次は『ジーニアス英和辞典』の記述 (at の 7b) である。

b [「試み」などを表す名詞と共に] …を目がけて [ねらって] の

make an unsuccessful attempt at joking [a joke] 冗談を言ってみたが受けない ◆同種の名詞：crack、effort、endeavor、go、shot、stab、try など。

[ジーニアス英和 (第4版)・和英 (第2版) 辞典、at の 7b]

(22) の例で考えてみよう。

(22) I made an unsuccessful attempt at joking.
(ジーニアス)

まず、at 自体には「～をねらって」という語彙的意味があるのではない、ということは、この辞書記述で「『試み』などを表す名詞と共に」というただし書きがあることから明らかである。もし at 自体に「～をねらって」という意味があるのなら、その意味は、at が使われる環境に全く関係なくその意味を持ち得るはずだからである。

さて、このような表現が用いられる文全体の意味は、「何かを試みる」というものである。(6)の立場では、at がここでやっていることは、その「何かを試みる」の「何か」が何であるのかを〈特定〉する、ということであるので、〈場所〉の事例と全く同じやり方で解釈が与えられることになる。一方、「点」とする立場ではどのような解釈になるのかは想像がつかない。

3.4 棲み分けによる差異化

他動詞用法と at を使う用法の両方が可能である場合には、非常に興味深い現象がみられる。この事実自体はよく知られているものであり、『ジーニアス』のような学習辞書でも詳しい説明が与えられている。⁵

8 [V at O]

a [達成に向かって] …をねらって動作を行なおうとする [試みる] 《◆ (1) at がなければ単なる他動詞用法で、行為が達成され (→ 第1例) その結果対象に影響を与えた (→ 第2例) ことになる。 (2) at があると、通例行為が達成されなかったことを表す》

He caught [grabbed] at the rope but missed it. 彼はロープをつかもうとしたが、つかめなかった 《◆ (1) at を省略すると「ロープをつかんだ」ことになり、意味が通らなくなる。 (2) at の有無で同様な意味の差がでる他動詞は、claw、clutch、grab、grasp、kick、smell、snatch、sniff、spray など》

The hunter shot at the bird. ハンターは鳥をねらって撃った 《◆ (1) at を省略すると弾が鳥に当たったことになる。したがって次のような文が可能：I shot (× at) a bird so let's have it for dinner. 鳥をしとめたので夕飯にしよう。 (2) The hunter shot (× at) the bird dead. (ハンターは鳥を撃ち殺した) のように結果を表す語句を伴った SVOC の文型的时候には at は使えない。 (3) at の有無で同様な意味の差がでる他動詞は、bite、cut など》

[ジーニアス英和 (第4版)・和英 (第2版) 辞典]

⁵ このような動詞では、ここであげた『ジーニアス』では、at がある場合には、ねらった目標物に当たらない、とまで言い切っている。しかし、例えば中右 (1994) では次のデータをあげ、at がある場合でも目標物に当たっているという解釈が可能であることを説得的に示している (p.328, (3))。

(i) a. *John shot the elephant, but he missed it.

b. John shot at the elephant, {and he hit it/but he missed it}.
ここから、『ジーニアス』の記述は言い過ぎであることが分かる。なおこのようなデータがあることは、匿名の査読者の指摘によって知るところとなった。

この辞書記述のポイントを次にまとめておこう。

- (23) a. *He caught the rope but missed it.
(ジーニアス)
b. He caught at the rope but missed it.
(ジーニアス)
at なし： つかむ
at あり： つかめたかどうかは不明
- (24) a. The hunter shot the bird dead.
(ジーニアス)
b. *The hunter shot at the bird dead.
(ジーニアス)
at なし： 当たる
at あり： 当たったかどうかは不明

動詞 catch と shoot は、at を用いない他動詞用法と、at を用いる自動詞用法がある。他動詞用法であれば catch できているはずであるので、(23a) のようには言えない。しかし at があれば catch しているかどうかは不明であるため、(23b) は問題ない。同様に、他動詞用法では弾が当たっているの、(24a) は問題ないが、at があれば弾が当たったという保証はないので、(24b) のようには言えない。

それでは、at 自体に「～をねらう (が当たったかどうかは分からない)」という意味があるのだろうか。

- (25) He looked at me.
○彼は私を見た (「何かを見る」の「何か」が私)
×彼は私を見ようとしたが私に視線をあてることができたかどうかは分からない

もし at 自体に「～をねらう (が当たったかどうかは分からない)」という意味があるとしたら、例えば (25) でそのような解釈が可能でなければならぬはずであるが、そのような解釈は実際にはあり得ない。それでは「～をねらう (が当たったかどうかは分からない)」という解釈はどこから来るのだろうか？

look には他動詞用法がない。一方、(23) (24) のパターンを持つ動詞には、全て他動詞用法が基本である、という共通点がある。(23) (24) と (25) の違いは、その点から出てきているはずである。(23) (24) の他動詞用法は、他動詞であるが故に、目的語の被動性は高いものがある。つまり、他動

詞用法の場合には目的語は直接的な影響を受けている。Grab ならばその目的語は「つかまれる」という状態であり、shoot ならば「あてられる」という状態である。さて、そういう用法があるという状態で、もう一つの用法があり、それが at を動詞と目的語の間に介在させる形である。

- (26) a. grab the rope ロープをつかむ
 b. grab at the rope 「何かをつかむ」の「何か」がロープ
 他動詞用法 (a) があるにも関わらず (b) ではそれをあえて使っていない
 ⇒ 棲み分けによる差異化の圧力

本稿では at の意味は〈特定〉しかないとしているため、at がある場合とない場合とで語彙的意味としては実質的な違いはないことになる。しかし at がある場合とない場合とでは、もちろん形が違う。そのため、語彙的意味の違いがなくとも、棲み分けによって差異化の圧力が働く。他動詞用法が「つかむ」である。そのため、差異化の対象となる自動詞+ at の方は、「つかむ」という動作の枠組みの範囲で「つかむ」という動作とは違う動作を担当しなければならない。そこで選択される解釈が「つかもうとする」であると本稿では考える。この分析では、at に何か特殊な意味を担わせようとしていないことに注意されたい。そうではなく、他動詞用法との共存という分布状況がそのような特殊な意味を非語彙的なものとして自動詞用法に持たせていると考えるのである。

語彙的な意味にない意味が棲み分けによる差異化で付加される際の特徴として、その解釈が「対となる相手次第」である、ということあげることができる。grab や shoot の場合には、その動作が外れる、ということが十分あり得るため、差異化の圧力のもとではその解釈が選択される。それに対し、kick の場合には少し事情が違う。目的語がドアである場合、蹴った足が対象に当たらないということは考えにくい。そのため、差異化は「蹴ったが影響はない」という方向に働くことがある。同じく『ジーニアス』では次の例をあげている。

- (27) a. He kicked at the door, but it didn't open.
 (ジーニアス)
 b. He kicked (× at) the door open.

(ジーニアス)

at がある場合には、蹴った結果としてドアが開かない、という状況は容認されるが、もしドアが蹴った結果開いたとすると、今度は at を使うことができない。このように、棲み分けによる差異化で得られる解釈は語用論的な要因で決定される。そして、もし at の語彙的な意味として (26) や (27) の違いを説明しようとする、これらの違いが意味論的なものではなく語用論的なものである、という事実を完全に見失うことになってしまうのである。

さて、以上の議論で重要な部分は、at の意味を (6) のように〈特定〉しかないと考える立場で初めてこの分析が可能になる、という点である。(6) の立場では、at に実質的な意味を想定していない。だからこそ、他動詞との棲み分けが成立するのである。もし at に実質的な語彙的意味があったとしたら、他動詞用法と自動詞+ at とでは、必然的に語彙的意味が違ってこなければならぬはずである。そして、語彙的意味が違う二つの表現の間には、最初から意味が違うのであるから、そこには棲み分けによる差異化によって意味の違いを付加する、という動機が最初から働かないはずである。

3.5 感情の変化

辞書では、at に「～を見て／聞いて／知って」という訳語が与えられている用法がある。

- (28) I was surprised at the news.
 (29) *I almost vomited at the news. (そのニュースを聞いてほとんど吐きそうになった)
 (30) Still others vomited at the sight of a basketball court. (COCA)

もし at 自体に「～を見て」という語彙的意味があるとしたら、(29) が容認されない理由はないはずである。と言うのは、(30) のように、vomit と at の共起自体には何も問題はないからである。だから at に「～を見て」という語彙的意味を想定することはできない。それでは、(28) のような用法はどのように考えたらいいのだろうか。

『ジーニアス』では、(28) のような用法で用いられる形容詞として次のものをあげている。

(31) 『ジーニアス』があげる、(28) の用法が可能な形容詞

aghast, alarmed, amazed, amused, astonished, delighted, disgusted, impatient, indignant, mad, pleased, puzzled [ジーニアス英和(第4版)・和英(第2版)辞典]

過去分詞が多く含まれることから分かるように、これらの形容詞には、「感情の変化」を表すという共通点がある。be動詞に過去分詞が続くと、形としては受動態になる。受動文においては、受動文の主語に対する何らかの変化と、その変化を働きかける動作主の存在が強く含意されることに注意されたい。(31) がただの「感情」の形容詞ではなく、「感情の変化」と言うのはそういう意味で言っている。一方、必ずしも「変化」を含意しない「感情」を表す形容詞は、(32) に見るように、この at を取りにくい。⁶

(32) ?I was happy/sad at the news.

(28) のように、この用法の文で述部が過去分詞である場合、at と並んで by を使うことができる。

(33) I was surprised at the news.
= I was surprised by the news.

by が用いられた場合には、by の目的語は紛れもなく動作主として認識されている。その by と交替可能である at も、動作主とまではいかにしても、動作主的な変化の要因として認識されるものを表示しているものと考えるのが自然である。その発想を図式化したものが (35) である。

(34) 「感情の変化」は、その変化を起こした要因があることを含意する

⇒ 文の意味内容は「何かの要因で感情の変化が起こる」

⇒ 受動態なら by

受動態でないなら、その「何らかの

⁶ (34) で見るように、(6) の立場では、「感情の変化」という文脈では、〈特定〉すべき対象としてその変化をもたらした要因を探しに行く、という想定になる。一方、(32) のようにその「変化」がない場合には、〈特定〉すべきものとして変化をもたらした要因を探しに行く、という動機は働かない、と考えることになる。

要因」が何であるかを〈特定〉する at

(34) の最終行は、これまで本稿の at の分析で用いてきたフォーミュラと全く同じ形をしていることに注意されたい。つまり、at の意味を (6)、すなわち〈特定〉である、と考える立場では、この用法も全く他の用法と同じであるということが正しく表示される。

4 結論

本稿の主張は次のものである。

・At の語彙的意味は〈特定〉であり、かつそれしかない

本稿の分析の特徴は、「中心義」や「中核用法」、また中心義でない・中核的でないその他の意味、というものを設定せず、at の全ての用法に共通する、極めて抽象度の高い意味を設定しているところにある。「At の様々な用法は、at 自体が持つ語彙的意味であり、そのどれかが中心義である」という考え方や、「空間用法が発点である」という考え方に囚われているとこういう発想にはならないのかもしれない。

そこから必然的に出てくる含意は次のものである。

・先行研究や辞書で設定されている「意味」は、at 自体の語彙的意味ではなく、at を導く部分が何を言っているのかで決まる派生的なものである

つまり、〈位置〉、〈時刻〉、〈状態〉、〈変化の理由〉、〈ねらう〉等々の at の用法とされているものは、独立した固有の語彙的意味ではない、という主張である。

更に重要なこととして、〈位置〉、〈時刻〉、〈状態〉、〈変化の理由〉、〈ねらう〉等々は、本稿の立場では、at の意味ではなく、at が置かれた環境・文脈の意味である、ということである。そこから、本稿の「はじめに」で見た用法の条件を分析し明示化することが、少なくとも前置詞や助詞のような文法形式素の意味研究でしなければならないことなのである、とまで言い切つてよいものと思われる。

引用文献

- 安藤 貞雄 (2012) 『英語の前置詞』 東京：開拓社 .
- Diven, Rene (1994) "Dividing up Physical and Mental Space into Conceptual Categories by Means of English Prepositions" in Cornelia Zelinsky-Wibbelt ed. *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing*. Berlin / New York: Mouton. pp. 73-98.
- 加藤 鉦三 (2007) 「デには意味がない」『レキシコンフォーラム』 3, pp.299-314
- 花崎一夫・加藤 鉦三 (2009) 「前置詞の棲み分け—in と on を中心にして」『英文学研究支部統合号』 pp.233—242.
- 花崎一夫・花崎美紀 (2009a) 「日英語の語レベルにおける相同性をめぐって」『信州大学人文社会科学研究』 3. pp.56-70.
- 花崎美紀・花崎一夫 (2009b) 「「場所」を表す語から見る相同性」日本英語学会第 25 回大会ワークショップ
- (2009c) 「前置詞の意味・助詞の意味」『JELS』 24. pp.253-254.
- Hanazaki, Miki and Kazuo Hanazaki (2008) "Semantics of Prepositions" ELSJ International Spring Forum
- Hawkins, Bruce W. (1994) "On Universality and Variability in the Semantics of Spatial Adpositions" in Cornelia Zelinsky-Wibbelt ed. *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing*. Berlin / New York: Mouton. pp. 327-350
- Herskovits, Annette (1986) *Language and Spatial Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hill, L. A. (1969) *Excercises on Prepositions and Adverbial Particles*. London: Oxford U.P.
- 加藤 鉦三・花崎 一夫・花崎 美紀 (2014) 「To の意味論—英語教育への応用を目指して—」『英文学研究支部統合号』 Vol VI . pp239-245.
- 小西 友七 (1976) 『英語の前置詞』 東京：大修館書店 .
- (1997) 『英語への旅路—文法・語法から辞書へ』 東京：大修館書店 .
- 小寺 茂明・小延 真生子 (2001) 「英語前置詞の語法研究」『大阪教育大学紀要 第 V 部門 第 50 巻』 第 1 号. pp.15-29.
- Linstrcomberg, Seith (1997) *English Prepositions Explained*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- 森山 智浩 編著 (2010) 『英語前置詞の概念』 愛知：ブイツーンリレーション.
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』 東京：大修館書店.
- Rauh, Gisa (1994) "On the Grammar of Lexical and Non-Lexical Prepositions in English " in Cornelia Zelinsky-Wibbelt ed. *The Semantics of Prepositions: From Mental Processing to Natural Language Processing*. Berlin / New York: Mouton. pp. 99-150.
- 田中 茂範 (2011) 『英語のパワー基本語：前置詞・句動詞編』 東京：コスモピア.
- 辞書
- 『オックスフォード現代英英辞典』 第 8 版 (2010) オックスフォード大学出版局.
- 『Collins コウビルド英英辞典』 (2012) センゲージラーニング.